

Title	瀬谷佐次郎著 経済原論
Sub Title	
Author	園, 乾治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.8 (1921. 8) ,p.1207(145)- 1211(149)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210801-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

り博士を責むるは素より酷なるべし。他方歴史そのものの意義に關する博士の意見を見るに、博士は歴史を解釋して三要件を擧げたり、「第一具體的事實に就きて研究すること。第二、事實を其の動く所の成り行きに就きて考察すること。第三、事實を由來あり、又效果あるものとして調査すること。」(上卷六二二頁)其の言は未だ十分明確なりと云ふを得ざれども、素より引用せる箇所は稍々古き講義録の一切なれば、殊更に嚴密なることを得ざりしなるべし。比較的を得たりと云ふべし。第三の條件たる事實を由來あり效果あるものと見ることは、暗にある事實が書かんとする歴史に何等かの價值關係ありてふことを豫想するものにあらざるか。更に第一の要件には個別的なる事實が實際惹起されたるものたることを要求し、第二の條件は時間的經過の必要なることを明示せり。事實博士の著作を見る時、經濟史が法制史に墮せず、政治史に終らずよく經濟史たるの實を擧げ得たり。唯惜むらくは完結されざりしことなりとす。然れど

も考證其の他種々なる述作はすでにそれだけに甚大なる價值を有し、吾人後學の徒を裨益すること少からず。吾人は宜しく博士の勞多き研鑽に多大の敬意と感謝とを拂はざるべからず。博士の經濟史そのものに對する意見を詳細に知らんと欲する者は「經濟史總論」「經濟史の性質及び範圍に就きて」「經濟史及其の研究法」經濟史の研究に就きて」「(以上下卷)を見るべし。博士が日本經濟史々料に關する勞作は「日本經濟史研究の材料に就きて」「日本經濟史參考書」(未完なるは最も惜むべし)。「維新前の經濟書に就いて」(以上上卷)等にて我國經濟史研究者の看過するを得ざるものなり。一般史としては前述したる二著收めて上卷にあり、其の外「本邦租税の沿革」「日本古代の通貨史に關する研究」「徳川時代特に中世以後に於ける外國金銀の輸入」(以上上卷)。「維新以前に於ける日本蠶業の發達に就きて」。「日本古代に於ける人民の移住に就きて」(以上下卷)等は特種の經濟史と見るべく、前掲の「田地割替の慣行に就きて」(上卷)を始め

瀨谷佐次郎著 經濟原論

菊版 四四四頁
定價 金四圓
内外出版株式會社

「日本上古の氏族制度に就きて」、「日本古代の村落制に就きて」、「本邦上古の地租に就きて」、「沖繩縣の土地制度」、「徳川時代の街道及宿驛に關する一二の所見」、「大福神傳」及び馬場正道に關する三種の論文(以上下卷)等に於いて博士の考證の嚴密なるを知り得べし。尙ほ本書下卷には此の外經濟學に關するもの、支那經濟史に關するもの等十數篇を收む。是等の諸論文に依つて與へらるゝ刺戟と暗示とに依つて更に日本經濟史の原野に一步を進むるを得ば、以つて僅に博士の勞に酬ゆることを得べし。吾人後進の徒は宜しく精進すること必要す、最後に遺稿全集の速に完結せられんことを祈りつゝ、妄評の筆を擱く。

野村兼太郎

著者瀨谷佐次郎氏は京都の同志社大學教授であつて、本書は氏が同大學法學部に於いて講義した稿本を基として著されたものである(序文)先づ目次によつてその結構を窺ふに氏は全體を三編に分ち、第一編を總論、第二編を生産論、而して第三編を分配論として居る。蓋し在來行はれた四分法なるものは、理論上並びに便宜上の何れより見るも當を得たるものでないといふ論旨に基いたものであつて、この點に於いては大體異論ないところである(本書一〇八一—一頁)。けれども生産、分配の二編とするか、或ひは生産、流通の二編とするかに就いては議論もあるであらうし、氏の態度も明かでない。氏は經濟學を以て一の記載科學であるとする立場にある。「經濟學ハ經濟現象を支配スル原則ヲ發見シ、之ヲ記載説明スルモノニシテ、一ノ

記載科學ニシテ規範科學ニ非ズ」となし、且つ「經濟學ノ記載科學タルノ性質ヲ有スルハ經濟原論ニ就テハ勿論」縱令其政策ヲ研究スルニ當リテモ、一ノ記載科學タルヲ以テ適當」(本書九一〇頁)であると述べてゐる。

氏は經濟活動の條件として社會制度と人口の二を挙げ、社會制度に於いては自由競争と財産私有制度に就いて詳論を試みて居る。即ち「財産權ハ、今日文明國ニ於テハ、全ク例外ナク、認めラル、所ニシテ、公有私有ヲ問ハズ、財産ノ所有ヲ認め、一定ノ財産ガ、一定ノ主體ニ歸屬スルコトヲ保護スルハ、人類ノ幸福上、重要ナルコト論ヲ待タズ」(四〇頁)「併シナガラ財産ノ私有ヲ認ムル所以ハ、活動ノ結果タル財産ヲ、其人ニ歸屬セシムベキコトヲ意味スルニ止マリ活動ノ結果以外ノ財産ヲモ其人ニ歸屬セシムベシトイフニアラザルハ勿論」(四一頁)であるから「資本家が不當ナル利益ヲ受クルトセバ(中略)之ヲ制限スベキハ勿論ナリト雖、資本家ハ勞働セザルガ故ニ勞働者ニ與フベキ生産ノ結果ヲ掠

大イナラシムル場合トアリ、孰レノ場合ニテモ效用ヲ増進スル爲ニハ既存ノ效用ヲ滅却シ又ハ減少スル場合少カラズ減少シタル效用ト増加シタル效用トヲ比較シ後者大ナル場合ニアラザレバ生産トイフコト能ハズ」(一一四頁)と生産の意義を定め乍ら、生産の種類の内に積極的の生産と消極的の生産を認め、「積極的の生産トハ、何等ノ手段ニヨルヲ問ハズ財ノ效用ヲ從來アリシヨリハ更ニ一層之ヲ増進スルモノヲイヒ」(一二〇頁)「消極的の生産トハ財ノ效用ノ滅失ヲ防グ一切ノ經濟的活動ヲ稱スルモノナリ」(一二三九頁)と消極的の生産なるものを許容するは果して如何であらうか。

次に資本に就いて氏の意見を徴すれば、氏は明かに資本に二個の概念を認めむとするものである。即ち「吾人ノ正當ナリト信ズル所ニヨレバ、資本トハ一國民經濟内ニ於テ生産ノ爲ニ使用セラル、土地以外ノ財ヲイフモノナリ」(二〇六頁)と所謂生産資本を定義し、營利資本を定義して「營利資本トハ、(中略)營利ノ目的ノ

奪ストイフハ、誤リタル論ナリトイハザル可カラズ」(四四頁)と主張するは些か不徹底の嫌がないではない。況んや「實際ニ於テハ、多クノ勞働者ハ生活ノ必要上自己ノ眞ノ自由意思ヲ以テ契約ヲ締結スルコト能ハズ」(四九頁)「勞働者ハ生命ニ對スル強迫ヲ以テ強制セラレ」(一八二頁)従つて事實に於いて「現在多クノ勞働者ハ勞働ノ自然的結果ナル營利上ノ收獲ニ比シ極メテ僅少ナル賃銀ヲ興ヘラレ」(一八三頁)るに過ぎないのであるから、當然資本家は利潤として餘剰を收得し集積することゝなるのではあるまいか。然かも「資本家が他人ノ生命ヲ脅カシテマデ、其財産ヲ所有スルトイフ事實ヲ自己ノ利益ヲ圖ルガ爲ニ利用スルコトハ財産權ノ濫用ナリ」此クノ如キ場合ニハ、其範圍内ニハ財産權存セザルモノト爲サザルベカラズ」(五〇頁)と信ずるものに於いては尙更のことであると思ふ。

「生産トハ效用ヲ増進スル經濟活動ヲイフ、新タニ效用ヲ作り出す場合ト、既に存スル效用ヲ爲ニ一經濟主體ガ支配シ得ル財ノ總括ヲイフモノナリ、即チ貨幣收得ノ目的ヲ達スル爲ニ一經濟主體ニヨリテ支配セラレ利用セラルル一切ノ財ヲ營利資本トイフモノナリ」(二〇八—二〇九頁)と述べてゐる。さうしてこの見解を採る理由として「營利ノ立場ヨリ觀タル資本ガ生産ノ立場ヨリ觀タル資本トハ必ズシモ一致スルコトナキハ恰カモ生産ト營利ハ必ズシモ一致スルコトナキト同様ナルベシト雖、此ノ如キハ固ヨリ生産論ノ與リ知ル所ニアラズ」(二〇六頁)と云つてゐる。嘗て福田博士によつて痛快にも一刀ぞろ復活せしめられた。然しながら克く人をして困惑せしめないで終るであらうか。「國民經濟上ヨリ資本ノ増殖ヲ論ズル場合ニ、貨幣ノ貯蓄論ヲ以テ之ニ應ズルハ明ラカニ概念ノ錯誤ナリト論ゼザル可カラズ」(二二五頁)と一派の謬想を打破したる程の氏も、分配論に入りて利子を論ずる場合には、曩に自ら定義したる資本の意義によつて、自縛自縛の結果を招いてゐる。即

ち「土地以外ノ財ノ使用ヲ他ニ許シテ、其對價トシテ收受スル所得ヲ利子ト云フ、其財ガ生産ノ爲ニ使用セラル、場合、即チ生産要素トシテ用キラル、場合ノミナラズ、純營利ノ爲ニ用キラル、場合ニ於テモ利子ヲ生ズルヲ常トス」(四〇一頁)と云ひながら「利子ハ財ガ營利的生産及ビ純營利業ニ於テ使用セラル、場合ニ、換言スレバ營利資本トシテ使用セラル、場合ニ限り發生スルモノトス」(四〇二頁)と、忽ち利子が純生産要素たる資本に仕拂はるゝものにあらずして、營利資本のために仕拂はるゝことを認め、且つ生産論に於て單に「資本」と稱したるものに對し新に「資本財」なる名稱を付し、兩概念を有する「資本」の區別をするの已むを得ざるに立到つてゐる。

これと同様の缺點は利率の説明に於ても現れて來る。即ち「資本財ヲ提供スルコトハ貨幣ヲ提供スルコトニヨリテ行ハル、從ツテ資本財利用ノ對價ハ其提供セラレタル貨幣ニ對シテ一定ノ貨幣ヲ提供スルコトニヨリテ行ハル、兩者ノ割

ことが出来る、その人口論、土地收穫遞減の法則、並びに勞働を論ずるところは著書の最も苦心の存するところであらう。二三の著書を除外、在來の多くの邦書が古い内容を古い形式で取扱ふ中に於て本書の如きは確かに一進歩を劃するものであらう。

園 乾 治

合ヲ利率トイフ」(四〇四頁)。「利率ハ資本財ニ對スル需要供給ノ關係ニヨリテ決定セラル」(四〇二頁)と云ふが如きは些か窮したる言ではあるまいか。

尙、氏は經濟學を以て貨幣の學問なりとするものにして「經濟學ハ貨幣ヲ以テ表ハサル、物質ニ關スル學問ナリトイフヲ得ベシ、簡單ニイヘバ、經濟學ハ貨幣ノ學問ナリトモイヒ得ルナリ」(一二二頁)。慾望の強弱を測るに方りても「其尺度ハ即チ、貨幣ニシテ或者ガ其有スル或慾望ヲ満足セシムル爲ニ、支出スルコトヲ否マザル額ヲ以テ其慾望ノ強サナリトスルモノナリ」(八一頁)。或ひは財も富も貨幣額を以て表すことを得るものにして、價值も亦貨幣額を以て表すことを得ると云へり。從つて貨幣の研究に對して分配論中の一章を充てたるは至當ならんも、全篇を通じて價值を論ずること頗る簡單にして、總論中僅かに五頁を費すに過ぎざるは、甚だ妥當ならざるやの觀がある。

雜 報

「經濟學名著集」の刊行

- 慶應義塾大學經濟學部の有志間には久しき以前より系統的に經濟學上の諸名著を翻譯するの計畫ありしが、今回愈々其第一期の計畫として「クラシカル・スクール」の代表的大著たる
- Adam Smith, Wealth of Nations.
 - Thomas Robert Malthus, Essay on the Principles of Population.
 - David Ricardo, On the Principles of Political Economy and Taxation.
 - Jean Baptiste Say, Traité d'Economie Politique.
 - Nassau William Senior, An Outline of Political Economy.
 - John Stuart Mill, Principles of Political Economy.